関西蔵前午餐会

ペリー黒船以前の外国からの脅威

平成28年2月2日

田 村 洋 一

内容

1. ロシアの南下政策
2. ロシアが日本に通商を求めた経過
3. レザノフ事件
4. オランダの盛衰と英仏との関係
5. フェートン号事件
6. レザノフ事件・フェートン号事件の影響

午餐会資料

『ペリー黒船以前の外国からの脅威』の関連歴史年表

平成２８年２月２日　田村洋一

西暦年	和暦年	内　容
1741	寛保元	ロシアのベーリング探検隊アラスカに上陸　(ベーリング海峡は1724年に発見)
1776	安永５	アメリカ独立宣言　独立戦争：1775～83
1789	寛政元	フランス革命起る　　ルイ１６世処刑：91年
1792	寛政４	ロシア使節ラクスマン、大黒屋光太夫を伴い根室に来航　信牌を持ち帰る
1795	寛政７	フランスがオランダ全土を制圧、総督ウィレム５世はイギリスに亡命。 ネーデルランド連邦共和国が終り、バタヴィア共和国となる(フランス系)
1798	寛政10	幕府・蝦夷地巡検隊が択捉島に達し、「大日本恵登呂府」の標柱を立てる。
1799	寛政11	オランダ東インド会社が解散し、国営となる
1800	寛政12	択捉島西海岸シャナ(紗那)に会所が置かれて役人が常駐する
1804	文化元	ロシア使節レザノフ、ロシア皇帝の国書を携え長崎に来航し、通商を求める 通商交渉不成功：帰途レザノフは部下に日本攻撃を命じる(1805年)。
1806	文化３	・ロシア軍艦２隻が、樺太南端のアニワ湾にある松前藩の番所と集落を襲撃 ・ナポレオンは、弟のルイをオランダ国王に(オランダ王国成立～1810) ・ナポレオンが大陸封鎖令を発する
1807	文化４	ロシア軍艦２隻が択捉島に上陸、松前藩士中川五郎治らを抑留する その後、択捉島シャナ会所が焼き打ちにあい、責任者戸田が自刃した。
1808	文化５	・イギリス軍艦フェートン号が長崎に入港 長崎奉行は責任を取って自刃 ・間宮林蔵ら樺太探検、間宮海峡発見
1810	文化７	オランダ フランス帝国の直轄領となる。
1811	文化８	ロシア人ゴロウニンが択捉島に上陸。その後国後島でゴロウニンは逮捕される。
1812	文化９	・ロシア軍人リコルドにより、高田屋嘉兵衛の観世丸が国後島で拿捕される。 ・ナポレオン ロシアの冬将軍により敗退する
1813	文化10	ゴロウニンと高田屋嘉兵衛の人質交換が行われる (これ以後1853年のプチャーチン来長崎まで、40年間ロシアとの交渉なし)
1814	文化11	ウィレム６世即位、パリ講和条約でオランダ独立回復
1815	文化12	ウィーン会議 ベルギーを含むネーデルランド王国を承認
1821	文政４	伊能忠敬『大日本沿海実測地図』完成。幕府に献上
1825	文政８	幕府 異国船無二念打払令を出す
1840	天保11	アヘン戦争(～42)。香港割譲、上海など５港開港、賠償金支払いなど
1842	天保13	幕府 異国船打払令を撤去して薪水供給令に復す
1853	嘉永６	ペリー艦隊 浦賀に来航 久里浜で国書を手交 ロシアの提督プチャーチン長崎に来航　　(同年：クリミア戦争開戦)
1854	安政元	日米和親条約締結　日露和親条約締結(1855、安政元年12月)
1867	慶応３	ロシア帝国、アラスカを720万ドルでアメリカに売却

注１：フランスがオランダを支配下に置いた時、フランスの支配は東インドまで及ばず、バタヴィアなどオランダ植民地はイギリスに占領された。長崎出島はイギリスの支配下になることを拒否

注２：１８世紀末に、ロシアは黒海北岸のクリミア半島を獲得した。

注３：網掛け部分は、本日の主題の事件が発生した年

千島列島の国境 択捉島とウルップ島の間　外務省HPより

極東ロシアとアラスカの関係地図

アラスカ州の地図・白地図より

１．ロシアの南下政策（１）

・南下政策：不凍港を得てロシアが南に領土拡大する。
（１）地中海方面
・18世紀末(エカテリーナ2世時代)にクリミア半島を獲得
・地中海方面への進出のためにはその出入り口であるイスタンブールを確保したい。ギリシア正教会の総本山コンスタンティノープル教会を異教徒の支配から解放する。これがロシアの大義名分
・オスマン帝国と紛争を繰り返す→1829年商船の通行権を得る
しかしフランス・イギリスとの関係で軍艦の通行権は得られず
・1853年クリミア戦争勃発。ロシアの大軍(100万人とも)がフランス、イギリス、サルデーニャ、トルコの連合軍(7万人)に敗れる。
・現在もクリミア半島やウクライナで問題を起こしている
（２）中央アジアへの進出：インドでの権益への脅威であるとしてイギリスとの厳しい対立を生む。

１．ロシアの南下政策（２）

（３）中国への進出：1860年にウラジオストックを清国から獲得
1891(M24)年シベリア鉄道建設開始、1904(M37)年全線開通
（４）日本へのアプローチ　目的：アメリカの植民地支配のため
・1741年、ロシアのベーリング探検隊がアラスカに上陸。
・レザノフ(伯爵)は毛皮商人シェリホフの事業を継ぎ、1800年に国策会社・露米会社を設立する。アメリカ大陸北西部の海岸地帯アリューシャン列島、千島列島の統治が許可され、<u>毛皮採取・鉱物採掘を独占的に許される</u>。
・食糧難でアラスカ入植地は崩壊寸前となり、レザノフはその維持のために日本と交易し、食料を確保しようと考えた。
・1804(文化元)年、レザノフは長崎に来航し、通商を求める。交渉は不成功に終わり、レザノフは部下に日本襲撃を命令する。露寇
→北方領域でロシア人の襲撃があり、幕府は北方警固を強める。

２．ロシアが日本に通商を求めた経過（１）

・１８世紀初め：日本人漂流民を教師として、日本語学校をひらく
・**1719年** 松前藩：蝦夷地の交易独占を許され大名となる（吉宗）
・1783年 大黒屋光太夫が遭難しアリューシャン列島に漂着。その後エカテリーナ２世に謁見。科学者ラクスマンの世話になる
・**1792年** ロシア使節ラクスマンが漂流民光太夫を伴い根室に来航し、通商を求める。幕府は目付石川忠房を派遣、長崎への回航を要請し、信牌(長崎入港証)を与える。ラクスマンは帰国。
・1798年 幕府巡検隊を派遣し択捉島に「大日本恵登呂府」の標柱
・1800年 択捉島西海岸シャナ(紗那)に会所を置き役人が常駐
・1804(文化元) ロシア使節レザノフがロシア皇帝の国書を携え長崎に来航し、通商を求めるが、不成功。翌年部下に日本襲撃を命じる：レザノフ事件の詳細は別スライドにて

２．ロシアが日本に通商を求めた経過（２）

・1806(文化3)年 ロシア軍艦が樺太南端の松前藩番所と集落を襲撃
・1807(文化4) ロシア軍艦が択捉島に上陸し、松前藩士中川五郎治らを抑留する。その後択捉島シャナ会所が焼き打ちにあい、警固していた日本人は反撃できず、責任者戸田が自刃した。
・幕府：ロシア船打払令を発布し、盛岡藩・津軽藩に増兵を命じる。この頃から西洋砲術の書物上での研究が始まる。
・1808年 間宮林蔵ら樺太探検、間宮海峡発見
・1811年 千島列島の測量を命じられたロシア人ゴローニンが択捉島に上陸。その後国後島で逮捕され、箱館で尋問後松前で幽閉。
・1812年副官リコルドが国後島に再来し、高田屋嘉兵衛の観世丸を拿捕する。翌年両者交換で双方釈放（穏便な解決の裏には本国でのナポレオンのロシア遠征が影響したようだ）
・その後1853年のプチャーチン長崎来航まで、ロシアとの交渉なし

３．レザノフ事件（１）

・文化元(1804)年、ロシアの伯爵レザノフは、ロシア皇帝の国書とラクスマンに与えた信牌を携え、通商交渉のために長崎に来航。
・この時、交渉に有利になると考え、日本漂流民４人を伴っていた。
・長崎奉行はロシア船を湾外に碇泊させ、乗組員の上陸も禁止し、武器弾薬を差出すよう要求した。レザノフは戦う意志のないことを示すため、弾薬を差出すことを了承した。約2ヶ月船内滞在。
・長崎奉行は江戸に処置を仰いで時間稼ぎに入った。長崎警備の佐賀藩の他に隣国から集まった軍戦がロシア艦を取り囲んだ。
・レザノフが船の水漏れ修理を強く求めたので、長崎港入口近くの梅香崎に仮宿舎を造り、ロシア人の上陸を許可した。
・幕府の方針は「通商は許可しない。国書も献上品も受け取らない。従ってロシア使節の江戸参府は認めない。これを了承するまで漂民は受け取らない」であった。これを伝えるため、目付の遠山景晋を長崎へ派遣した。

３．レザノフ事件（２）

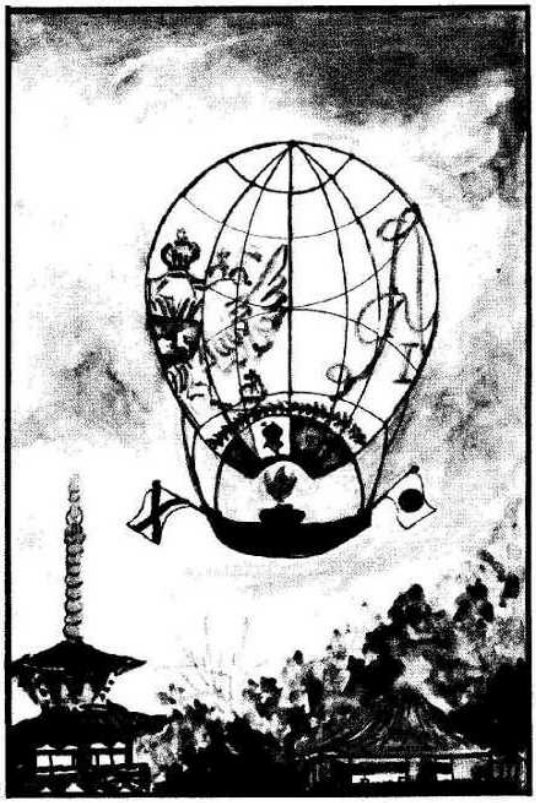
・事務的な手続きが終わった段階で４人の日本人漂流民を引き取り長崎奉行所が何回も取り調べた。主内容はキリスト教入信有無
・レザノフは、何も得ること無しに帰国することになった。そこで武力による日本開国をロシア皇帝に上申した(承認されず)。
・レザノフは武力による日本報復を決意し、部下に命ずる。
ロシア艦が樺太、択捉島の日本人を襲撃した。内容既に述べた。
・余談１：レザノフに同行したドイツ人の船医が、和紙を用いて熱気球を作り、芝に火を点け、気球の下に取り付けたアルコールランプで熱気球を飛ばした。1月8日のことであり「日本で最初に気球が上がった日」とされている。詳細次のスライド。

余談2：「日本人として最初に気球に乗った人」は1867年パリ万博に慶喜の名代で渡欧した徳川昭武である。万博後のパリ留学中に。

余談3：仙台藩の漂流民を藩医の大槻玄沢が40日かけて事情聴取し、これらをまとめ『環海異聞』(1807)を仙台藩主に献上した。

4. オランダの盛衰と英仏との関係(1)

・14世紀オランダは毛織物加工で栄えていた。中心都市はブリュージュ(現ベルギー領)からアントワープへ移る。
・スペインのフェリペ2世(在位1556～1598)の時代に、オランダはスペインの支配下になる。カトリックとプロテスタントの争いが絡む
・スペインからの独立戦争は1568年に始まり、1609年に事実上の独立を果たす。独立が全欧的に認められるのは30年戦争の終結を告げるウェストファリア条約(1648年)にて。
・1600年リーフデ号豊後に漂着。アダムス徳川家康の外交顧問に。
・1602年オランダ東インド会社設立。ヴァタビアに拠点を置く。
・この後「栄光の17世紀」と呼ばれるオランダの絶頂期を迎える。
①魚業(ニシン、タラ、大型加工船) ②貿易(香料、砂糖、コーヒーなど) ③海運業 ④造船業 1670年にオランダ所属の船数はイギリスの3倍、ヨーロッパ全てを合わせてもオランダに及ばず。



熱気球図

古いロシアの文献をもとに、ロシア人作家グザノフにより復元された。その絵が、松竹秀雄著の「ながさき稲佐ロシア村」(長崎文献社)に掲載されている。

絵に描かれているのは、左にロマノフ王朝の紋章、右側にロシア皇帝アレクサンドラ1世の頭文字AとＩである。

4. オランダの盛衰と英仏との関係(2)

・蘭英戦争(1652～74):オランダの貿易による利益削減とイギリスの世界的制海権確立のため。第1次から第3次まで。第2次:オランダの海外植民地をイギリスが襲う。例ニューアムステルダムがニューヨークに(1665)。第3次:英仏相手に戦う

・アメリカ独立の余波:中立を通したが、オランダのアメリカへの密貿易がイギリスにばれ、イギリスはオランダ東インド会社関係を攻撃。1784年の講和条約で、海外植民地のほとんどを失う。

・1793年フランス革命軍はオランダに宣戦布告。1795年ウィレム5世はイギリスに亡命。オランダ共和国は消滅。ヴァタビア共和国

・ナポレオン1世:1799年統領政府を樹立し、自ら第一統領となり、1804年帝位に就く。

・1806年弟のルイをオランダ国王に。ホラント王国に。
大陸封鎖令→オランダの滅亡、ロシア遠征の引き金に

4. オランダの盛衰と英仏との関係(3)

・1808年イギリス船フェートン号が長崎に入港:詳細は後述

・1810年、ナポレオンはオランダをフランス帝国に(オランダ国消滅)

・1812年、ナポレオン:ロシアの冬将軍に敗退する

・1814年のパリ講和条約において、オランダ王国の独立が承認

・1813,14年 ヴァタビア政庁(イギリス支配下)が長崎出島を支配下にしようとするが失敗する(シャルロット事件)

・1815年 ウィーン会議でオランダを立憲王国として独立を認める。イギリスはオランダをフランスに対する緩衝国とする狙い。1811年に占領していたジャワ島とその周辺をオランダに返還する。

余談1:ヴァタビアがフランス、イギリスに占領されていた時、出島オランダ商館はアメリカ船を雇い、辛うじて出島貿易を維持した。

余談2:オランダがナポレオンに占領されると、世界でオランダの国旗が翻ったのは、出島とアフリカのエルミナ城のみ。

フェートン号(長崎歴史文化博物館)

5. フェートン号事件(1)

・1808(文化5)年 イギリスは2隻のオランダ船が日本に向かっているという情報を得て、拿捕する目的で軍艦フェートン号 を派遣。大型木造軍艦で、大砲48門。艦長ペリュー、19歳。名門出、父は子爵
・長崎入港前五島沖で何日も待伏せしていたが、オランダ船は姿を見せず、食料や水が乏しくなって長崎港に向かった。
・フェートン号はオランダ国旗を掲げ、長崎に入港した。オランダ商館員2名と旗合わせの検使(奉行所役人)がフェートン号に向かう。
・イギリス兵がオランダ商館員を連れ去る。日本人役人は逃げ帰る
・長崎奉行・松平図書頭激怒する。長崎に2ヶ所台場があったが、フェートン号の大砲の方が威力があり、手を出せず。また佐賀藩(長崎警固の年番)の兵はわずか100人余りで無防備状態。
・奉行は佐賀藩、福岡藩、西国14藩の聞役を集め出兵を命ずる
・オランダ人の身柄返還を求めるが、逆に薪水の提供を求められる

5. フェートン号事件（2）

・翌朝(16日)にはフェートン号はイギリス国旗を掲げ、湾内を徘徊する牛や野菜の要求があり、「今日中に食べ物を寄越さないと明朝には湾内にある日本船・唐船、さらに市中を焼き払う」と強硬な通告。
・長崎奉行所が仕方なく品物を送ると、オランダ商館員１人を釈放し、飲料水と食料を寄越せば残りのオランダ人を釈放すると脅迫する。
・16日～17日にかけて、日本側はイギリスの要求品を運び続けた。
・17日昼頃、フェートン号は悠然と長崎港を出航した。
・午後になって、佐賀藩、大村藩・島原藩・福岡藩・五島藩などから兵が続々と集まる、という無様な失態をさらけ出した。(関ヶ原合戦そのままの装備で戦っていたらどうなったか？)
・長崎奉行は責任を取って18日早朝、「無念、屈辱」の思いを書き記した遺書を残して、割腹自刃。長崎の深堀領主、聞役など7名も切腹
・警備役の佐賀藩の武士は、帰藩の途次に16人が切腹
・佐賀藩主鍋島斉直は100日間の閉門謹慎という逼塞処分を受けた

5. フェートン号事件続編：シャルロット号事件

・1811年ヴァタビアのオランダ政庁は英国の支配下になり、イギリス人ラッフルズが総督に就任(それ以前はフランスが支配)
・ラッフルズは出島のオランダ商館員は金で買収できると考えた。前商館長のワルデナールを買収して、長崎に向かわせた(1813年)。
・商館長ドゥーフはワルデナールと再会し、祖国がフランスに併合され、ヴァタビアがイギリスに征服されたことを聞かされた。
・ワルデナールはラッフルズの書簡を見せて、イギリスの支配下になるように説得するが、ドゥーフは応じない。
・商館長ドゥーフは5人の全てのオランダ大通詞を集め、協力を仰ぐその内容は「イギリスの2隻の船を傭船として処理する」である。
・積荷はオランダ商品として例年通り長崎会所に売却された。
・翌年シャルロット号で再来日した。ドゥーフは「もし取引に応じなければ、全てを奉行所にぶちまける」と恫喝して、出島をイギリスの支配から守った。

６．レザノフ事件・フェートン号事件の影響（１）

・レザノフが乗って来たナジェージダ号の艦長クルーゼンシュテルンが、後に『世界周航記』を著す。このためか、口伝か、長崎に入港せずに江戸に近い浦賀の方が有効であることが知れ渡る。

・1845年アメリカの捕鯨船マンハッタン号は鳥島に漂着していた11名と漂流する船の乗組員11名を救助した。クーパー船長は長崎へ行かず近い浦賀に入港。老中首座阿部正弘は日本人を受け取り、十分な薪水食料を与えた。

・米の捕鯨船の無法者15名が松前藩で確保され、長崎に送られた。長崎では素行不良で、長崎奉行は鉄格子内に禁錮。米東インド司令官は自国民の虐待と考え、長崎に来たグリン艦長は最初から高圧的に出て、奪回に成功する。帰国後「日本を開国させるには兵力を以て威嚇する限る」と報告。

・1853年に来航したペリーは、レザノフ事件を教訓にして、浦賀に来航し、江戸幕府に高圧的に振舞ったのではないか。

６．レザノフ事件・フェートン号事件の影響（２）

・フェートン号事件→佐賀藩主鍋島斉直の閉門謹慎の余波

・佐賀藩古賀穀堂は、儒学者であるが、蘭学が西洋を知る学問であり、藩士は蘭学を学ぶべし。また佐賀藩伝統の『葉隠』が言う「武士道とは、死ぬことと見つけたり」を痛烈に批判した。

・藩主斉直の跡を継いだ斉正(後に閑叟)は殖産興業を図ると共に町人からの借金を実質踏み倒し、藩の改革に着手する。

・長崎警備強化のために、藩内で大砲を製作する技術を養う。また幕府から50門の大砲を受注している。

・反射炉・ボイラー工場などを築き、自力で蒸気機関車・蒸気船の模型を造り、後に蒸気船「凌風丸」を造り上げた。

・佐賀藩は英国製アームストロング砲を所持していた。佐賀藩は鳥羽伏見の戦いまでは中立であったが、上野彰義隊との戦から参戦アームストロング2門からの12弾で戦争は終結。「薩長土肥」誕生

おわりに

ご清聴ありがとうございました。

今年の予定

<u>神戸外国人居留地研究会</u>

7月:『日本の近代競馬は居留地から』を投稿予定

<u>兵庫歴史研究会</u>

11月 「咸臨丸始末 建造から廃船まで」を口頭発表

12月 同上、機関誌『兵庫歴研』へ投稿

広報誌『歴研ひろば』に6回投稿予定

作成：2016/02/29　長井

蔵前-関西午餐会メモ…第 689 回蔵前関西午餐会　『ペリー黒船以前の外国からの脅威』　講師：田村洋一氏（S41 修　制御）
平成 28 年 2 月 2 日(火)　13 時～14 時 15 分　大阪中央電気倶楽部 317 会議室　出席者　計　29 名

１．ロシアの南下政策

18 世紀、ロシア帝国はピョートル帝・エカテリーナ女帝をはじめとする積極政策で、南進南下を推進（例：アゾフ海クリミヤ半島占領(1700/1774)、1829 オスマン帝国からボスホラス海峡の商船(のみ)通行権利を取得）したが、その一部(イスタンブール・スエズ等は英国が支配、地中海全域は仏国覇権下など)を欧州(敵対国)に握られており、成果は不十分のままであった。（この結果は 1905 日本海々戦に向けて、露艦隊がバルト海リバウから３万㌔（地球 3/4 周に相当）航海を要することにつながっている）南欧進出は、クリミア戦争(1853)になって、英仏等連合軍に大敗。これもかなわずのまま。極東・アラスカ方面に、ベーリング探検隊派遣など毛皮・鉱山の開発政策をすすめ、その補給地として日本地域への交渉（通商）を求めてきた。

２．ロシアが日本に通商を求めた経過

日本からは、海流影響による漂流漁民・交易商人の漂着に基づく文化接触が 18 世紀から続いていた。有名な大黒屋光太夫を廻るラクスマン使節の来日(長崎へ)や、松前藩による蝦夷地開拓と領有宣言（ｴﾄﾛﾌ島への標注建立）をはじめ、さまざまの交流・交渉（紛争）が知られている。なかで『レザノフ事件（３．項に詳述）』は、皇帝からの国書を携えた使節レザノフと徳川幕府が、直接ぶつかりあう厳しい内容であった。しかし、その数年後から、欧州各国(典型は数次のクリミヤ戦争)からの攻勢もあって、極東(日本)への侵攻はプチャーチン来航まで約 40 年間記録されていない。

３．レザノフ事件

ロシア皇帝の国書を持ち、レザノフ伯爵は長崎に来航（1804）して、幕府に通商（=開国）交渉を要求した。しかし長崎奉行所（江戸幕府）は頑なに対応を拒否、これに怒ったレザノフは種々の強硬措置を講じた。松前藩・千島列島などで種々の紛争事件が約 10 年続いた。

４．オランダの盛衰と英仏との関係

ヨーロッパ各国のせめぎ合い・覇権争いにより、オランダの独立性は 18 世紀末に殆ど消滅した。そうした盛衰により欧州列強による世界の制海権は、オランダ（バタビアの東インド会社・長崎出島商館などを開設・操業）からスペイン・英国に移行した。極東の覇権・商業権も大きく変わり、中国・インドシナ半島は、英・仏両国が主導権を握り支配する時代になった。

５．フェートン号事件（1811 年）

アジア覇権を掴んだ英国は（中国に続いて）日本への覇権獲得を志し、オランダ商館通じての通商要求行動を開始。軍艦フェートン号で長崎港に押し入って、武力威嚇を行った。武装力に劣る長崎奉行以下の幕府諸兵は、殆ど対抗できず、手を拱くだけだった。オランダ商館長が、外交々渉でわずかに対抗し英国船（フェートン号他）の横暴を（翌年以降は）撃退したが、長崎奉行他多数武士の割腹自刃など屈辱の外交史実を残す結果になっている。

６．レザノフ事件・フェートン号事件の影響

両事件（19 世紀初頭）から約 30 年は、諸外国間同士の抗争(戦争)もあり、偶発的な事件(漂流漁民・捕鯨船の難破など)以外、大きな事件は少なかった。しかし、幕府の政策・対応、国民性などの知見が諸外国に伝わり、19 世紀半ばからの来日軍人（その代表がペリー--浦賀来航(1853)）の外交行動に影響している。一方、屈辱を味わった日本国内諸藩は、国防諸政策・武装近代化に注力することになった。

その代表例は佐賀藩で、藩主率先のもと、殖産興業・技術革新を図り、自力で工業の基礎を築いた。のちの東芝につながる産業基盤の整備(三重津海軍所等)を創設している。また、こうした工業力は維新戦争にも影響を与えた。

以上